

# 1980年代から2000年代におけるサラリーマン雑誌の機能

## ——『BIG tomorrow』読者投稿欄の分析を中心に——

慶應義塾大学 谷原吏

### 【1. 目的】

1980年代以降の日本社会については、社会学者や評論家によって様々な時代診断がなされている。例えば80年代について、大澤（2008）は、オタク文化や東京ディズニーランドに象徴される「虚構の時代」とであると表現し、宮台（1995）は、輝かしい未来が期待できない「終わりなき日常」が始まった時代であると述べた。また東（2001）においては、大きな物語の喪失という80年代以降の社会観を前提としてオタクの出現を論じている。こうした時代診断は、オタク文化やブルセラ少女、宗教といった社会におけるエッジの部分をつ捉えての評論である。それに対し本報告では、これまで着目されてこなかったサラリーマン雑誌に焦点をあて、その機能の変容を探究する。この作業により、日本社会の経済や文化を少なからず支えたであろう中流サラリーマン層のモードを明らかにし、上記の時代診断に新たな視点を持ち込むことを目指す。

### 【2. 方法】

1980年代以降一定規模以上の発行部数を有していた『BIG tomorrow』及び『プレジデント』の二誌を素材として扱う。両誌における1980年代から2000年代にかけての紙面構成の変容に配慮しながら、特に『BIG tomorrow』の読者投稿欄における話題の変化を通時的に分析することを中心に据える。

### 【3. 結果】

『BIG tomorrow』の読者投稿欄は、主として「仕事や生き方に関する話題」と「恋愛に関する話題」により構成されている。今回着目した前者の割合は、80年代末に一時減少するものの、対象時期を通じて概ね増加傾向にある。その動きと連動している相談内容は「人間関係に関する不満」である。それに対して、各年代において特徴的と思われる相談内容は以下の通りである。80年代：生き方への漠然とした不安 90年代：景気悪化によるサービス残業やリストラ等具体的な労働環境への不満 00年代：有能な同僚や困った部下の逸話など日常の出来事の報告 読者投稿欄以外の記事については、90年代末頃から方針転換がなされており、それまで中心だった処世術や性に関する記事に取って替わり、副業や投資等の金銭に関する情報に紙面が割かれるようになる。そして『BIG tomorrow』は部数を落としていく。一方、2000年代以降部数を伸ばしたのは『プレジデント』であった。同誌は、80年代、90年代を通じて歴史上の人物の出世物語を特集していたが、2000年代以降、心理学等を参照したコミュニケーションのハウトゥを紙面構成の中心に据えていく。

### 【4. 結論】

以上を踏まえると、サラリーマンを取り巻くメディアにおいては、大きな物語の喪失から終わりなき日常への埋没というモードは、既存研究が示すよりも少し遅れて現象したように考えられる。すなわち、80年代から90年代においては、少なくともメディアの送り手側からは「処世による出世」という物語が発信されていた。それに対応して、読者もその時々を経済状況に応じて日々悩んでいた様子が伺える。そして2000年代に入り、景気の回復により生活不安が減少すると、コミュニケーションや人間関係へと関心が焦点化されてゆく「終わりなき日常」という様相を呈することになる。

### 文献

東浩紀，2001，『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』講談社。

宮台真司，1995，『終わりなき日常を生きろ—オウム完全克服マニュアル』筑摩書房。

大澤真幸，2008，『不可能性の時代』岩波書店。